

## ▼二十六聖人に学ぶ▼

校長 阿南 孝也

毎年中学3年生の研修旅行で、長崎駅近くの西坂の丘に建つ「二十六聖人記念館」を訪れます。二十六聖人は、豊臣秀吉の命令によって京都の教会(四条堀川付近)で捕らえられ、冬の厳しい寒さの中、長崎まで裸足で歩かされて処刑されました。1597年2月5日のことでした。当時この丘は海に近く、外国船からも26本の十字架がよく見える場所でした。「日本史」の著者で知られるルイス・フロイスの報告により、この大殉教はスペインをはじめヨーロッパ諸国で大きな反響を呼びました。そして江戸末期の1862年、ローマ教皇ピオ9世によって聖人に列せられました。1865年大浦の居留地に、二十六聖人に捧げられた大浦天主堂が、西坂の丘に向かって建てられたのです。

列聖100年を記念して殉教の地に建立された26聖人のレリーフ像の前で、館長のレンゾ神父からお話を伺うことができました。レンゾ神父が話された3つのポイントを紹介します。

1つ目は「ゆるす」ということです。殉教者の一人であるパウロ三木は、十字架上から「私は、私の処刑に関わったすべての人をゆるします」という説教を行いました。彼は武士階級の人でした。復讐は当たり前、殺さなければ殺される戦国の世にあつて、復讐ではなくゆるしを説くパウロ三木の姿は、集まった数千人の群衆や処刑にあたった人々に驚きと感銘を与えたことでしょう。パウロ三木は、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです(ルカによる福音書 23章34節)」と祈られた十字架上のイエスに倣い、天に召されていきました。「平和の実現のためには、ゆるすことが必要です。まず、身の周りのささいな衝突に対して、やり返すことをやめて、ゆるすよう努力しましょう」と生徒たちに訴えかけられました。

2つ目は「共同体の力」というお話でした。国籍(日本人20名、スペイン人4名、メキシコ人1名、ポルトガル人1名)や出身地、身分も異なる集団が、京都から長崎まで1か月に及ぶ過酷な旅の中で、支え合い助け合いながら、殉教を目指す仲間としての絆を深めていったのです。彼らは、むしろ喜びのうちに過ごしていたと伝えられています。「仲間を大切にしてください。一人ひとりの持つよい所を見るように心がけましょう」とのアドバイスをいただきました。

3つ目は「祈りの力」です。誰でもいつでもどのような状態にあつても、祈ることができます。「祈りを大切にしてください」と話されました。

今年9月に、マザーテレサが列聖されました。また来年2月には、列聖の前段階としての高山右近の列福式が大阪で行われます。聖ヴィアートルをはじめ、聖人たちは私たちの模範であり保護者です。彼らの生涯は、時代を超えて、力強く温かな励ましのメッセージを与えてくれるのです。物に溢れる現代社会にあつて、目に見えない本当に大切なものを見失うことなく生きていくことができますように、祈りたいと思います。

12日から考査が始まります。体調管理に気を配って考査に臨んでください。よき学びは、必ず皆さんの人格形成の大きな力となるはずです。考査中の1週間、考査後タブローまでの1週間、時に適った過ごし方を心掛けてください。